

「入試現代文と乖離しない現代文授業の模索」

真壁 美紀（中村中学校・高等学校）

1. はじめに

私が勤務する中村中学校・高等学校は2009年に創立100周年を迎えた中高一貫教育を行う江東区の私立女子校である。生徒の9割以上が4年制大学への進学を希望しており、年々進学意識は高まっている。学校としても、授業や、講習、学習合宿などの様々な授業外サポートを通して、いかに生徒の実力を養成するかということは、非常に重要な課題となっている。

ここでいう「実力」とは、進路希望を叶えるための「実力」はもちろんだが、それだけでなく、社会に出て必要となる様々な能力を育成し、社会の一員として機能していくことができるという意味での真の「実力」でなければならない。学校という教育現場で表面的な偏差値学力を伸ばすことだけを目的とすることはあってはならない。しかし、私は現在高校3年の担任をしているが、これを偏差値という指標のみで捉える生徒が多くいるように思う。生徒の希望進路実現、そして、偏差値のみにとらわれない真の実力の養成を両立する授業はできないものだろうか。高校現代文指導に8年間携わってきた中で、私が試行錯誤しながら考えたことをこの場を借りてお伝えしたい。

2. 「現代文」で何を学ぶか。何を伝えるか。

まずは高等学校における現代文の指導目標の原点を確認すべく、新学習指導要領を引用する。

高等学校 新学習指導要領〈国語〉（抜粋）

第2款 各科目

第4 現代文B

1 目標

近代以降の様々な文章を的確に理解し、適切に表現する能力を高めるとともに、ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てる。（傍線は引用者による）

とある。本校で目指す真の実力養成もこれに基づいている。これを踏まえ、なおかつ入試現代文で必要とされる学力養成のために私が掲げた現代文授業の指導目標は、

- ① 教材一つ一つから、様々なものの見方、感じ方、考え方を学ぶ。
- ② 文章を的確に読む力および適切に表現する力を養い、それにより正しく「解く」

力を身に付ける。

という2点である。

そして、その目標を達成するために、授業で扱う文章世界を身近な問題として主体的に捉え、考える機会を、意図的に作るようにした。授業時間は有限であり、全ての教材に長い時間をかけることはできないため、教材に応じてメリハリをつけるようにしている。特に、定番文学教材はじっくり扱い、作品世界を味わい主体的に考えることができるようにし、評論教材は短時間で、主題や筆者の主張を的確に読み取ることに主眼を置いている。また、読書量が豊富でなく、それにより言語知識も不足しているため、副教材を用いて読解力（論理的な思考力）を養い、知識（語彙力・現代文テーマ理解）を蓄えることも授業プログラムに取り入れた。

3. 現代文を「暗記科目」・「ノー勉科目」にしないために

現代文という科目は、得意な生徒にも不得意な生徒にも誤解されたり、間違った取り組みをされたりしがちである。現代文でよく見られる誤解は

- ・ 日本語なんだから、勉強しなくても大丈夫。
- ・ 授業でやったことを暗記すれば、テストは大丈夫。
- ・ 現代文の授業と入試現代文は全く別だから、学校の現代文は勉強しても意味がない。

というものではないだろうか。この誤解が現代文を単なる「暗記科目」あるいは「ノー勉科目」にする言い訳になっているように思う。そのため、この誤解を解くことも現代文担当者の大きな役目だと私は考える。

（1）主体的な学びを通して、多くの作品に共通するテーマがあることを知る。

乱暴な物言いかもしいが、究極のところ、理屈抜きで「現代文」という科目に興味を持ってもらえば、「ノー勉」「丸暗記」から脱することができると思っている。その意味でも、私は少しでも現代文に興味を持ってもらいたい、しかも受身ではなく主体的に現代文を学ぶ喜びを知ってもらいたいと強く思いながら授業に臨んでいる。一例として、その授業実践を挙げる。

【「主体的に考える」、「考えを相互交換し深める」ことを促す授業実践】

〈羅生門〉

☆『羅生門』と原典『今昔物語集』の比較から『羅生門』の特徴を読む

高校1年の定番教材である『羅生門』を扱うときには、教科書を用いたオーソドックスな授業をした後に、原典である『今昔物語集』の「羅城門登上層見死人盗人語」（29巻第18話）をプリントして配布している。古文として高校1年で読むのにも決して難しくない文章であるため、あまり抵抗なく読ませることができると思う。そして、芥川の『羅生門』と『今昔物語集』を比較して気づいたことを個々にまとめ、発表し合う。

〈『羅生門』は、下人が盗人になる心情の推移を描いたものだが、『今昔物語集』では、「盗セムガ為ニ」京都に来た男となっており、最初から盗人である。また、老婆についても、『今昔物語集』では、『羅生門』のように、人物描写が詳細でない。〉

大まかにいうとこのような相違点を導いていく。『羅生門』の下人は生徒たちと同年代であり、現代も作品世界と同様に経済不況であるということも手伝って、最初は表現が不気味だといって拒絶感を示す者も、読み進めていくうちに、または原典との比較を通して、主体的に読むことの面白さに気づいていく（授業者としてもそのように鋭意努力する）。

『羅生門』の主題には、

- ・ 「生きんが為に、各人各様に持たざるを得ぬエゴイズム」（吉田精一『芥川龍之介』1942）
- ・ 「新しい〈勇氣〉の獲得」・「生きることは謀叛」（関口安義『芥川龍之介』1995）
- ・ 「善と悪を同時に併存させる矛盾体としての人間そのもの」（駒尺喜美「芥川龍之介論—その精神構造を中心に—」『芥川龍之介の世界』1967）
- ・ 「この平凡な、どこか憎めない、しかも雨の夜の羅生門という舞台がその"sentimentalisme"に影響するような男を視点に、髪を抜く妖しい老婆や死体を配しての、羅生門がかもし出す、王朝的、というよりかなりエキゾチックな雰囲気の世界それ自体」（平岡敏夫『羅生門論』1973）

など諸説あり、主題を一つに定めることはできないが、私は『羅生門』を通して、人として未完成な若者であることも含めた人間の持つ矛盾性を読むことができると考えている。

（諸説ある主題と私の考えは生徒にも伝える。この際、生徒が「結局どう読んでも自由」と誤解しないよう、確実に読み取れる点とそれに基づく自由な鑑賞が許容される点との線引きをすることが、非常に難しいが大切なことである。）また、授業の最後には、この作品を通して考えたことをレポートとして書かせる。集団の中では積極的に意見や気づきを発せられない生徒もいるが、レポートは全生徒が書くので、ことばを綴りながら、自己と向き合い、考えを構築していくという行為を通して思考を鍛えることができる。また、レポートを考査と併せて評価材料に加えることで、考査では測るのが難しい思考力や表現力も加味することができ、より多角的な成績評価ができる。

〈山月記〉

☆『山月記』と原典『人虎伝』（日本語訳）の比較から『山月記』の特徴を読む

『山月記』は格調高くリズムカルな文体で文章そのものが魅力的な作品であるが、『羅生門』同様に、原典と比較することで作品の特徴を読むこともできる。『人虎伝』は李徴が未亡人と密通していたり、虎になった原因が未亡人の家に火を付けたことであったり、話が荒唐無稽である。また、『山月記』のキーワードである『羞恥心』『自尊心』という語もない。『山月記』の主要部である主人公「李徴」の苦悩が『人虎伝』には表

現されていない。つまり、『山月記』を通して、李徴という個人やこの作品世界だけにとどまらない人間の苦悩というものを学ぶことができるのではないだろうか。

〈こころ〉

☆『こころ』の読みを深める取り組み

『こころ』は、何度読んでも、何度授業で扱っても読む度に新たな発見があり、私自身にとっても大きな魅力を感じる作品である。教科書では下「先生と遺書」の一部を採択しているが、その部分だけでは「先生」の全体像を理解することが難しい。私が授業で扱う際は、必ず事前に文庫本を購入させ、作品全てを読んでおくよう指示する。授業では文庫本を手元に用意させ、教科書採択部分を読み進めながら、他の部分で大きく関わりがある場面がある場合（例えば、本校で採択している明治書院の「新精選現代文」では、Kが先生に「精神的に向上心のないものはばかだ」と最初に言い放った場面は採択されていない）は、文庫本を用いてその箇所を確認しながら読む。授業時間数にも限りがあるが、長編小説である分、『こころ』から読み取れる「人のこころの奥深さ」は計り知れず、できる限りじっくりと時間を取って、主体的に生徒に学ばせたい教材である。一通り読み終えた後は、生徒自身から、全体で話し合うべきテーマを挙げてもらい、話し合う問題設定を行い各自で問いに対する考察を出していく。以下は、生徒の考察をまとめたプリントの一部抜粋である。

『こころ』読みを深める（まとめ）

〈「先生」の自殺〉

●自殺の動機

- ・ 自分自身の欲とエゴイズムが引き起こしたKの自殺に重い罪を感じ、生きている心地を感じられなくなったから。
- ・ 自分がKを殺してしまったという、罪を感じることが自殺につながった。
- ・ Kを自殺に追い込んでしまったことに対する罪悪感から。
- ・ 贖罪のため。

●なぜ、すぐには自殺しなかったのか？

- ・ お嬢さんのために生きるというのも「償い」だった。
- ・ Kを出し抜いてまでお嬢さんを手に入れたかったから。
- ・ まだ死にたくない。妻と過ごす時間が欲しいというエゴイズム。
- ・ きっかけを失った。
- ・ すぐに自殺してしまったら、ただ死ぬだけで苦しみが無い。Kを死に追いやってしまったという苦しみと罪悪感を感じてから死のうと思った。
- ・ 本当は早く死にたかったが、そうすると妻を悲しませることになると思い、タイミングを逃してしまったから。

●なぜ「私」だけに自分の過去を打ち明けたのか？

- ・ 親しい間柄でありながら、昔の自分とは無関係の唯一の人物であったから。
- ・ 過去の事件に関係している人には伝えられない。しかし、先生が生きていた証を残したいし、誰かに本当のことを知ってもらいたい。その点からするとちょうどいい人物だった。
- ・ 何も自分の過去を知らない「私」が親しく話しかけてきたのが、「先生」にとって久々の人間としての感情を思い出させることだったから。
- ・ 誰かに過去を打ち明けることで、Kに対する懺悔とし、また「先生」自身、誰かに伝え、自分の行いを知って少しでも自分を非難してもらうことで、だれにもとがめられないまま生きてきた自分に対する罰とした。人に咎められることによって「先生」の心も少し軽くなる気がしたから。
- ・ Kの自殺後、死んだ気で生きていこうとして人との接触を避けて生きてきたが、「私」と出会うことで再び人間と接し、人間的な生活をしたことから「心」を思い出し、自分と人間的に接してくれた「私」に心を開くようになる。そして、人間として罪を償うのだと考え、真実を明らかにすることで罪を償おうとした。
- ・ 「私」には自分と同じ道をたどってほしくないから。
- なぜ「明治の終焉」とともに自殺することにしたのか？
- ・ 新しい時代に自分だけ進んでいく訳にはいかないと思ったから。
- ・ Kが死んだのと同じ時代に自分も死のうと思った。きっかけを求めている。

〈「こころ」というタイトルの意味〉

- ・ 人は口や態度で思っていることを全て表すわけではない。
- ・ 人間の「心」は七変化して、理性やら欲やらでどのようにでも変わってしまう。
- ・ 善悪、両方含めて「心」なのということ。

〈『こころ』のその後について〉

- 「私」は先生の自殺を食い止められたか。

→くいとめられなかった。

- ・ 先生は死ぬ機会をずっとうかがっていて、ようやく決心がついたのだから、もう翻さない。
- ・ 首をつるとか、橋から飛び降りるとか、そういう派手な死に方ではなく、静かに安らかにひっそり死ぬのではないか。
- ・ 先生は人目を気にする人だったから、だれにも見られずにさっと、無様な最期にならないようにしたと思う。

→くいとめられた。

- ・ 奥さんを一人にしてしまうことを考えれば食い止められたのではないか。
- 「私」は「先生」の過去を「奥さん」に伝えたか。
- ・ 「私」だけに話してくれた過去だから、秘密は守り通す。
- ・ 先生の過去は「私」にとっては人生の教訓だから、奥さんに伝える必要はない。
- ・ 「私」は、ものすごく悩んで悩んで、もしかしたら、先生に罪の吐き場所をつくって

あげるために奥さんに話すかもしれない。

●「私」のその後

- ・奥さんには先生の罪を打ち明けず、一人悶々として自殺しそう。
- ・「私」は先生の代わりに墓参りをするようになる。

中には、根拠の乏しいもの、妥当性の低いものもある。例えば、「私」が先生の自殺を食い止められたか否かという問いについては、上十二に「先生はそれを奥さんに隠して死んだ」とあることから、「私」が先生の自殺を食い止められなかったことは明白である。しかし、主体的に考えることをまず第一として評価した上で、その妥当性を授業内で検討していく。それにより、客観的な正しい読みに基づき主体的に考え、表現することの大切さと楽しさを全体として共有する。（共有できるよう授業者として努める。）

以上、ここでは定番文学教材を3つ挙げたが、

『羅生門』＝人間に焦点をあて、その心理・心情を描いていることを理解し、単なる勸善懲惡ではない人間の持つ矛盾性を学ぶことができる。

『山月記』＝人物の心情を深く掘り下げ、その苦悩はある種、普遍的なものでもあるということを学ぶことができる。

『ころ』＝『ころ』を通して、人が生きるとは、自分が生きるとはどういうことか学び、考える契機とできる。

と、「人間」を読むという共通点を見出すことができる。当然、各作品にはそれぞれ多様な読みがあり、一つの共通点だけでこの三作品を括ることはできない。また、多様性があるからこそ文学は興味深いのだということもできるだろう。だが、「人間」は、近代文学、いや近代思想の根底を支える重要なテーマである。その「人間」を共通テーマとして読むことは、他の文学教材にもつながるものであり、多くの評論を読み解く上でも有益なのではないだろうか。そして、その共通テーマを単なる知識として与えるのではなく、主体的な学びを通して生徒自らの気づきによって理解していくことができれば、真の実力を養成することにつながるはずである。

現代文授業で扱う文学・評論教材の多くは、近代という時代と何らかの関わりを持っている。そして、入試現代文でも近代批判は頻出テーマである。近代批判を理解するには、当然のことながら近代という時代への理解がなければならない。つまり、現代文の授業を通して近代という時代のあり方をそのものを理解することは、入試現代文を突破し希望進路を叶えるために大きな意味を持つのである。このことを生徒が自ら理解できるように促していく必要がある。

本校では、授業者が「近代」を意識させるよう話をするほかに、副教材（「読解を深める現代文単語〈評論・小説〉」桐原書店）を用いて、小テストを実施しながら、広い意味で語彙力を強化し、教養を高める努力をしている。また、授業内・授業外で演習を取り入れ、入試現代文で扱われるような文章を読む機会を増やしている。

(2) 考查を通して自己を知り、自主的自律的に学習する姿勢を養う。

高い実力をつけるためには、生徒自身が、文章を的確に読み、正しく解く力を身に付けられるよう努力しなければならない。現代文に興味を持ってもらうことは重要だが、興味を持って授業を「聞く」だけでは完全とは言えない。しかし、授業を聞いて、考查前にノートを覚えることが現代文の勉強だと誤解している生徒は多い。その誤解を解くためには、「授業を聞くだけではだめだった」、「丸暗記だけではうまくいかない」というある種の失敗体験をさせることも有効だと私は考えている。そのため、私は「親切すぎない板書」を心がけている。「親切すぎない板書」とは、わかりづらい板書ではない。板書を写しただけのノートをただ暗記しても、定期考查で満点にはならない板書である。たとえば、黒板に図式化して説明することがよくあるが、その図を文章でまとめて板書し、さらにそれをそのまま答えれば済む問題を作れば、それは親切すぎる板書ということになる。黒板には図だけを書く、あるいは、それをまとめる際は板書せず口頭でのみ伝えるなど、黒板に全てを残さないことを意識的に行っている。それにより、生徒各自が必要に応じて工夫を加え、主体的に努力する姿勢を培うことが目的である。

実は、初めて教壇に立った頃は、いかに得点させるか、ということが生徒の理解の指標であると身勝手な勘違いをしており、親切すぎる板書をし、穴埋めすればよいだけの親切すぎるプリントを作っていた。だが、採点する際、板書と一字一句同じ答えを書く生徒が何人も現れたときに、自分が良かれと思ってやっていたことは、かえって生徒の力を削いでいたのかもしれないということに気づき、考えを改めるようになった。

もちろん、生徒の学力や学習意欲には個人差があるので全ての問題でそのように作問するわけではない。また、短時間で一つの文章を扱うときなど、必要に応じてプリントを作成することもある。全ての生徒に適した考查問題を作ることは非常に難しく、毎回頭を悩ませているが、聞いてさえいればまず得点できる問題、教科書やノートの重要箇所を覚えれば得点できる問題、そして正しい理解と正しい表現が要求される問題、というようにねらいを定めて作問するように努めている。また、記述問題の採点のときにも、正解を含む内容さえ書いていけば良しとするのではなく、内容に過不足がある答案は厳しめに減点している。

私は、定期考查も重要な学びの一つだと考えている。考查を学習のゴールとするのではなく、自分の実力や今後の課題に気づくテキストとして生徒に捉えてもらいたい。作問や採点は時間との勝負でもあり、なかなか思うようにいかないが、今後も生徒にとって学びのテキストとなる考查作りを心がけていきたい。

[真の実力を養成するために]

授業のあり方

現代文の授業を通じて、表面的な文章理解だけでなく、根底にある思想、時代性も含めて作品を理解することで、入試現代文にも対応できる教養を身につける。

評価の工夫 →評価されることで、生徒の主体的な取り組みを促す。

- ・ 考 査……解説も含め、考査も重要な学びの一つとして捉える。
的確な読解力を身につけるためには、生徒各々の主体的努力が必須であることを知る契機にする。
- ・ レポート……考査では測りきれない、生徒の学習意欲や取り組む姿勢、本質的な思考力、表現力などを含め、多角的に評価する。